

甲状腺細胞診アトラス 報告様式運用の実際

坂本穆彦(編)

北里大主任教授・呼吸器外科学

佐藤之俊

「診断カテゴリーに特徴的な細胞所見」が圧巻

『甲状腺細胞診アトラス—報告様式運用の実際』が上梓された。本邦初の甲状腺細胞診に特化したモノグラフである。副題に「報告様式運用の実際」とあるように、甲状腺診療に直結する項目が目白押しといえる内容である。

まず、呼吸器外科医である私がなぜこの本の書評を？、といぶかしむであろう読者にその理由をお伝えしたい。私は今から30有余年前に病理を学んだが、本書の編集である坂本穆彦先生の勧めもあってサイロイドクラブに参加した。このサイロイドクラブが母体となって、日本甲状腺病理学会が設立されたことをご存知の読者も多いことと思う。当時は、現在甲状腺病理分野で名だたる先生方がまだ新進気鋭の若者であった頃で、甲状腺はわずか20～30gの臓器で、病理切り出しは難しくなく、乳頭癌と濾胞性腫瘍の診断ができれば十分かな、というのが私の安易な考えであった。その頃の知識といえば、乳頭癌は核所見、濾胞性腫瘍は被膜浸潤の有無といったポイントを外さなければ、それなりの病理診断はできるというようなものだったかもしれない。このような事情から、「30年にわたる甲状腺研究の進歩をよく理解するように」という坂本先生の指導の一環として書評を依頼された次第だと思う。

さて、サイロイドクラブ時代と違う立場で本書を手にとってみると、何ともわくわくするような内容であった。一般に、アトラスやガイドラインの多くは“わくわく”というよりは、“しぶしぶ”あるいは“やむなく”といった、必要に迫られてひもどくという性質の本である。しかし、本書はアトラスを超え、細胞写真の質の高さ、規約、組織分類、診断の問題点など、甲状腺を専門としない者にとっても、ついそばに置いておきたい一冊である。

中身を見てみたい。本書は「総論」、「診断カテゴリーに特徴的な細胞所見」、そして「NIFTPをめぐる諸問題」の3つの章から構成されている。まず「総論」の章では、甲状腺癌取り扱い規約の細胞診報告様式に沿って解説がなされており、特に検体採取と検体処理についてわかりやすいシェーマを数多く用いながら解説されている。圧巻なのは第2章の「診断カテゴリーに特徴的な細胞所見」である。本書名にあるように“アトラス”としての役割が見事に凝集されており、350枚を超えるきれいな図(細胞写真)がコンパクトな解説とともに目に飛び込んでくる。

第3章は取り扱いが問題となっているNIFTPについて、40ページを割いて解説がなされている。この概念がWHO分類に追加された理由として、過剰診断や過剰治療が問題となった米国の事情は理解できるが、実際に、本邦において、あるいは、国際的に広く導入すべきものなのか、複雑な問題を有している概念であることがよくわかった。

いずれにせよ、本書は甲状腺診療を専門とする読者のみならず、診療や研究の現場で活躍する医療者や研究者、そして、“甲状腺学”あるいは“甲状腺細胞診”を始めたばかりのビギナーまで幅広く活用できる必携の一冊であるといえる。



●B5/頁 256/2019 年
定価：本体 10,000 円＋税
[ISBN978-4-260-03909-3]
医学書院 刊